

思い出の彼方より

—— テオドール・シュトルムの『今と昔』への考察 ——

久保田 聡

Von Jenseits der Erinnerungen

—— Bemerkungen über Theodor Storms "Von heut und ehedem" ——

Satoshi KUBOTA

要旨

本稿は 19 世紀ドイツリアリズム期を代表する作家のひとりであるテオドール・シュトルム(1817-1888)の作品『今と昔(Von heut und ehedem)』(1873)において、シュトルム自身と考えられる<私>とシュトルムの母方の<祖母>の視点から、かつての曾祖父の家や祖父の家とそこに集まる人々の様子、そしてさらには故郷の町フーズムがどのように描き出されているかについて考察することを目的とする。自らの記憶のものはや届かない<祖母の過去>にまで話を繰り広げる<私>からは、失われてしまったものへ哀惜の念を抱き、それを物語の中で再びよみがえらせようとするシュトルムの姿が見て取れるのである。

キーワード：旅，思い出，風景，故郷，海

I. 過去への旅と<私>の不安

物語冒頭、列車に乗り込む<私>がいる。駅長から良い座席をと命じられた車掌が案内したのは「少し揺れはするが(Es schaukelt nur ein wenig.)、最も安全な(der sicherste)」最後尾の車両だった。

「一番安全だって？」—— 危険など誰が考えただろうか！—— 鉄道旅行でもあの古い物語『シリアに行くひとりの男』が通用するというわけなのか —— けれども私はこんなことを口に出しはしなかった。私たちは列車に乗り込み、すぐに充分ゆったり腰をおろした。「私たち」と私が言ったのは、ふたりの女友達が成り行き任せで3等車で私の旅につき合うことになったからである(1)。

列車の行き先はハンブルク。<私>の目的は伯父一家を訪問するという、一見何の変哲もないものである。しかしながらここで、忍耐強くおとなしいはずのラクダに突然襲いかかられたことに端を発し、旅人が次々と危険に晒されるという内容の『シリアに行くひとりの男』が引き合いに出されることによって<私>がすでに、いつ何が起こるかわからないという<不確かさ>と<不安>に取り憑かれていることが暗に示されているのである。走る列車の窓に打ちつける雨は<私>の不安を一層かき立てる。

そうなのだ、まさにうってつけの天気だ。そして私はそれらの不安がざわざわと物音を立てるのを耳にした。今日の不安は私自身がいつの間にか持ち込んだのかもしれない。けれども私が家に残しておきたかった他の不安がしっかり扉を閉ざした車両の中にどうやって入り込んだのか、私にはわからない。不安は次から次へとやって来た。明日の不安ばかりでも明後日の不安ばかりでも来年の不安ばかりでもない。不安はひとかたまりになって群がり出て来たのである。それはまるで、ひとつの不安が別の不安を呼び込んだかのようだった。未来の霧の彼方から、人生の終わりから不安がこちらに向かって飛んで来た。新たな不安が私のところに飛んできて鳥のような足で私にしがみついたびごとに、私はそれを感じて胸がどきりとした。そしておしまいには墓の彼方からの不安までもがやって来たのだ(2)。

しかしそれにしても、＜私＞の「不安(Sorge)」とはいったい何なのだろうか。

ハンブルクの伯父の家に着いた＜私＞は家の人々に持参した一冊の古文書を見せる。それは1747年に創立した「連合友好協会(Die vereinigte freundschaftliche Gesellschaft)」の規約書であり、そこにはすべての会員の名前とシルエットが掲載されていた。会員の中には＜私＞の母方の祖母の父ヨアヒム・クリスティアン・フェッダーセン(1740-1801) (すなわち＜私＞の曾祖父) や、その祖母の婚約者ジーモン・ヴォルトセン(1754-1820) (すなわち＜私＞の祖父) とその父フリードリヒ・ヴォルトセン(1725-1811) (すなわち＜私＞の曾祖父) の名前がある。古文書の中から自分たちの祖先の面影を見出した一家の人々は次第に「連合友好協会」の昔に思いを馳せ、＜私＞の話に耳を傾けるようになる。

このように、いわゆる枠物語の形式を取って祖母マグダレーナ・フェッダーセン(1766-1854)の「昔(ehedem)」をめぐる物語が展開する。舞台はシュトルムの故郷の町フーズム、＜私＞の曾祖父の家で「連合友好協会」の会合が催されている。ホスト役を務める曾祖父の傍らで客人を接待しつつも祖母は商用で到着の遅れる婚約者を待ちかねている——もちろんこの場に＜私＞が実際に居合わせたはずがない。＜私＞は自分が生まれるはるか「昔」の情景を祖母の視点を借りて「今(heute)」によりがえらせようとしているのである。しかしながらそれが祖母の「昔」である以上、＜私＞にとってそれは自らの「過去」と密接に繋がった延長線上にある「昔」なのである。祖母の過去をよみがえらせることは、自らの過去を「回想する(erinnern)」することだけでは遠く及ばない、「記憶」のさらに向こうの世界への「旅」を意味するのだ。ハンブルクへ向かう車中で＜私＞が抱いた「不安」は一方では確かに自らの人生、すなわち「未来への旅」への不安と考えることができるが、もう一方で祖母の過去を語ることの「不確かさ」、すなわち「記憶の彼方への旅」への「不安」にも重なり合うのではないだろうか。

それでは＜私＞はこの「不確かさ」と「不安」をどのようにして解消するのであろうか。次章では＜私＞と祖母とをつなぎ止める＜仕掛け＞について考えてみることにする。

II. ＜私＞と祖母とをつなぐもの —— フェースリの『夢魔』とヒュギエイアの彫像

曾祖父の家では「連合友好協会」の宴もたけなわ、待ちに待った婚約者がついにやって来て、祖母は彼が旅先でしたための一通の手紙を受け取る。そんな祖母の若き日の幸福な姿と共に、その背景をなす舞台すなわち曾祖父の家の様子(3)が庭や調度に至るまで鮮やかに描き出される。宴が開かれている大広間の壁は「さまざまな作風の銅版画やそれぞれ別々のパステル画でほとんど

覆い尽くされていた」(4)のであるが、その中でもスイスの奇才ヨハン・ハインリヒ・フュースリ(1741-1825)の『夢魔(Nachtmahr)』がひととき異彩を放っている(5)。

[...]夕暮れ時最初に影がさす暖炉の横あたりに比較的小さな絵画が掛かっていたのだが、そんな夕暮れ時にたったひとりで遠く離れた大広間に入らなければならないようなことになれば、快活な祖母でさえもこの絵画とは目を合わせたいとは思わなかった。若い女性が暗い部屋の中で知らぬ間に眠りから呼び起こされてソファーに投げ出されたかのようなだった。髪はうしろにたれ下がり、頭は深くずり落ちている。女性の胸の上にはコウモリのような大きな毛むくじゃらの翼をつけた夢魔がしゃがみ込んでいる。女性は手足を動かすことができない。おそらく女性の開いた口からは呻き声が発せられていることだろう。夜の孤独の中で助けもなく女性は夢魔に身を委ねているのだ。ただカーテンの間から黒馬の頭が不作法な目つきで見ているだけである。馬は夢魔をここまで乗せてこなければならなかったが、自らはそこから立ち去ることができないのだ。確かに祖母はこのように一度も遭遇したことはなかったのだが花婿の姉は、かつて夢の中でこのような化け物がナイトテーブルからどうやって胸の上に飛び乗ったかを話して聞かせた。 [...]

[...]Dort neben dem Ofen aber, wohin bei Tagesabschied zuerst die Schatten fielen, befand sich ein kleineres Bild, dem selbst die heiteren Augen des Großmütterchens nicht gern begegneten, wenn sie um solche Zeit allein das abgelegene Festgemach betreten mußte. Die jugendliche Frauengestalt in der düstern Kammer schien wie unbewußt vom Schläfe auf das Ruhebett hingeworfen; der Kopf mit dem zurückfallenden Haar hängt tief herab. Auf ihrer Brust huckt der Nachtmahr mit großen, rauhen Fledermausflügeln. Sie vermag kein Glied zu rühren; vielleicht geht ein Stöhnen aus ihrem geöffneten Munde; hilflos in der Einsamkeit der Nacht ist sie ihm preisgegeben. Nur durch den Vorhang sieht der wildblickende Kopf eines Rappen, der ihn hieher hat tragen müssen, der selbst nicht von der Stelle kann. — Zwar dem Großmütterchen war dergleichen niemals widerfahren; aber des Bräutigams Schwester hatte erzählt, wie einmal von ihrem Nachttisch solch Unwesen im Traum ihr auf die Brust gesprungen sei; [...] (6)

『夢魔』をめぐっての言及がなされているこのくぐりで注目すべきことは時制の混在である。すなわち、最初から「投げ出されたかのようなだった」[...] schien.....hingeworfen)までが過去形、そのあと「立ち去ることができないのだ」[...] nicht von der Stelle kann)までは現在形になり、それから再び過去形に移っているのである。

まずは現在形の部分を見てみよう。ここではフュースリの絵画の中の女性と夢魔と黒馬がどのようなかについての説明がなされているのであるが、フュースリの絵画は<私>にとっても——さらに言えば我々読者にとっても——「今ここにあるもの」として存在し続けているのだから現在形が用いられることになる。一方過去形の部分はフュースリの絵画が当時の祖母にとってどのようなものであったかという、<私>の現在とは本来かけ離れたことがらについての記述なのである。しかしながら「今ここにある」フュースリの絵画が介在することによって現在形と過去形との混在が可能となり、<私>と若かりし頃の祖母との距離はぐっと近づくことになる。

さてここでひとつの疑問が生じる。それは「若い女性が暗い部屋の中で知らぬ間に眠りから呼び起こされてソファーに投げ出されたかのようなだった(Die jugendliche Frauengestalt in der düstern Kammer schien wie unbewußt vom Schläfe auf das Ruhebett hingeworfen.)」という文に過去形が用いら

れていることである。一見すればこの文もまた、後に続く文と同様にフュースリの絵画についての説明なのであるから現在形でよさそうなのになぜ過去形なのだろうか。その理由は「～ようだった(schien)」のが<私>にとってでもこの絵画を見る一般人にとってでもなく、あくまで「祖母にとって」そのように「思われた(schien)」と解することができることによる。すなわち、「この絵画とは目を合わせたいとは思わなかった」とは言うものの祖母はこの『夢魔』の世界から決して無関心ではいられなかったということが明らかになってくる。「暗い部屋の中で夢魔に身を委ねている」女性の姿は、夕暮れ時の大広間でこの絵画の存在に恐れを抱いている祖母の上にも暗い影を投げかけるのである。

やがて物語は曾祖父の家から祖父すなわち若き日の祖母の婚約者が両親の住居の向かいに新たに構えた家へと舞台を移す。新居を訪ねた祖母であるが、婚約者はもちろん、当時まだ家政を切り盛りしていた彼の実妹フリーデリカ・ヴォルトセン(1766-1795)も見当たらない。

彼女が再び広間に足を踏み入れた時、ほとんどぎょっとするところだった。差し出した手に杯を持った等身大の白い姿が、幅の広い大理石の舗石に据えられた上品な暖炉の台座の上で彼女に向き合って立っていたのである。彼女は笑わずにはいられなかった。彼女も知っていたことなのだが、それは昨日ようやくここに据え置かれたヒュギエイアの像であり、ほんの少し前に彼女はこの像のそばをふり返ることもなく通り過ぎて広間を出たばかりだったのだ。

健康を司りアポロンを助けるこの美しい目の女神、この女神がいなければ誰もが幸福にはいられない、そんな女神と彼女は折り合いがよかった。彼女はこの女神の杯からたっぷり飲み干すべく選ばれた者たちのうちのひとりだったのだ(7)。

ヒュギエイアの像は祖母の健康を約束しているようである。彼女は庭に出て菩提樹の園亭に腰を下ろし、「胸の飾り布の下からそこにしまっておいた手紙を取り出した。この手紙を彼女はもちろんすでに実家の小部屋で開封して読んでいた。しかし読んだのは最初の一回きりだったのだ。」(8)——このようにまさに幸福の絶頂にあった祖母のことを「このどこにまだ影があったというのだろうか」(9)とコメントする<私>だったが、そのあとすぐに次のような逆説を展開するのである。

しかしながらヒュギエイアの賜物は不吉なものなのだ。女神の杯からあまりにもたくさん飲みすぎる者は、甘美な青春時代にほほえみかけてくれた人々がみんな死んで行くのを見なければならぬ。けれどもそうなってもなお女神の好意が示される。死を経験しなければならぬ人々自身は陽気な瞳を現在に向けていた。未来の亡霊は彼らに何の力も及ぼさないのだ(10)。

多くの人々はみな「シリアに行くひとりの男」よろしく今を享受するだけで未来を案ずることはない。ヒュギエイアに「選ばれた(erwählt) 祖母が長寿を保てば保つほどそんな人々の死に目に遭わなければならないのである。フュースリの『夢魔』から祖母が無意識のうちに感じ取っていたものは迫り来る死の影への恐れに他ならない。

1820年9月、祖母の夫ジーモン・ヴォルトセンがこの世を去る。享年65歳だった。翌年シュトルム一家は祖母ひとりが残された家に移り住むことになる。シュトルムが3歳のころである。

これ以降<私>は祖母と文字通り時と空間を共有することになるのである。そんな<私>が実際に接した祖母はどのような存在だったのだろうか。そしてさらには、祖母との思い出と共に<私>すなわち作家シュトルムは何を伝えようとしているのだろうか。最終章で検討してみたい。

III. 失われてゆくもの、心に残る風景

夫に先立たれ、娘夫婦一家と住むことになった祖母マグダレーナにはその後さらに30年以上の時間が残されていた(11)。<私>が書き記すのは最晩年の祖母とのやりとりである。思い出話の中で祖母が人を取り違えていることを<私>は指摘する。

年老いた祖母は突然口を閉ざした。承服させられる悲しみの表情が彼女の愛らしい顔に浮かんだ。「ああ、お前」、やっと口を開いて彼女は言った、「私の頭がいかれちまったんだよ。もう充分長く生きてきたからねえ」。

我々のような若い世代の者の考えではかけ離れたものと思われる時代や人物を取り違えるようなことがここ数年間で彼女にはしばしば起きた。そんな時我々は横からうまい具合に教えようとしたのだが、彼女はただ「厄介者にだけはなりたくないものだよ」と言うばかりだった。

彼女の快活で控えめな人柄は長い人生の間変わることがなく、私の青春時代に多くの幸福なひとときをもたらしたが、自分ひとりではどうすることも出来なくなった今となっては彼女の快活さはもはや持ちこたえられそうになかった。けれども彼女は、若かりしころに最も幸福なひとときを共にした夫と、さらにはまた、この世では成人となることが叶わなかった彼女の小さくて朗らかな子供たちと再び相まみえたいと願うのだった(12)。

今は亡き人々を偲び、彼らと共にした過去の思い出に生きる祖母へ向ける<私>のまなざしはどこまでも優しく、そして悲しい。幼い頃から祖母の昔話に耳を傾けることもしばしばであったであろう<私>にとって祖母の過去はもはや切っても切り離せないほどにまで心に刻み込まれていたのである。さらに、30年以上にわたって一緒に暮らした家もまた、祖母にとっての思い出の家であるばかりではなく、<私>にとっても思い出の家なのである。

3階の屋根裏部屋には、2世代にわたる年月を経て次第に日々の使用から消え去ってしまうのが常であるような、ありとあらゆるがらくたが収納されていた。それらのものは捨ててしまう勇気を持たないために使い古されたまま打ちやられたものであったり、おそらくは二度と再び手に触れることがないものなのである。ただし、今の時代の苦しみや空虚さがゆえに我々がより豊かな過去の象徴へと逃げ込みたいという気持ちに駆り立てられる時は別であるが(13)。

「今の時代の苦しみや空虚がゆえに我々がより豊かな過去の象徴へと逃げ込みたいという気持ちに駆り立てられる ([...] daß das Leid oder die Leere der Gegenwart uns antreibt, zu den Zeichen einer reicheren Vergangenheit zu flüchten.)」のが<私>の心境であるならば、それはまさしく祖母の心境と一致する。それは失われたものへの哀惜の念であり、古き良き時代を懐かしむ想いである。

<私>は祖母の過去をたどりつつ故郷フーズムの過去に想いを馳せる。

私は上の庭にある菩提樹の園亭に腰を下ろしていた。菩提樹は年毎に剪定されたために今ではびっしりと枝を広げており、日差しを遮るためにはもはや葉は必要ないほどだった。古き時代は終わってしまった。かつてフーズムの町とほとんど同時期に建立された教会は、すでに私が生まれる前に、首尾良く取り壊された。古くて威厳のある建物の代わりに今では黄色い不格好なウサギ小屋のような建物が建っていた。それは四角い窓が2列に並び、胡椒入れのような塔を持ち、入り口の上にはすでにいなくなった牧師によって記章された、詩という名のすべての異教徒に対する生きた抗議とでも言えそうな忌まわしい格言詩が掲げられていた(14)。

15世紀ゴシック様式のマリーエン教会は老朽化が激しく、先に述べた<私>の曾祖父ヨアヒム・クリスティアン・フェッダーセンがホストを務める「連合友好協会」の宴席でも「高い教会の塔の荒廃を主張し教会全体の取り壊しを要求する声が大きくなった。するとすぐに、まるで多くの他の諷刺詩の表題になるような最初の諷刺詩が広間の中に広まっていった。後になって小さな町が非常に苦勞して町で最も古い記念碑的建造物を取り壊した時、この諷刺詩を唱えて自らの行いをあざけることになったのだ」(15)というように、取り壊しか保存かをめぐってまさに賛否両論だった。けれども「計算高いフーズムの商人たちにとってゴシック教会の修復費用はあまりにも大きすぎるものだった」(16)のである。いかなる理由からにせよ、マリーエン教会を「首尾良く」取り壊してしまったことに対して<私>は強い憤りを感じている。しかしながら取り壊しをめぐって熱い議論が戦わされた「連合友好協会」の時代には美や芸術が入り込む余地が今よりもまだずっと残されていたと<私>は思うのである。

それは信仰心のない無味乾燥な時代であり、美や芸術のすべての祝福から見放された時代だった。そして我々はいまだにそのことに苦しまなければならないのだ。けれども「連合友好協会」の古き紳士たちはみんな永遠の眠りにつくよりも前に美や芸術が地平線から立ち上るさまを遠くからかろうじて見ることができたのだ(17)。

1873年——時代は急激な変化を遂げていた。人々の価値観が変わり「昔」が次々と打ち壊されてゆく時代に逆らうようにして『今と昔』は書き上げられたのである。それならばシュトルムのこの試みは無力な抵抗に過ぎなかったのだろうか。確かに「あきらめ」がシュトルム文学の特質のひとつに位置づけられていることも事実である。しかしながらこの作品には「失われてゆくもの」ばかりではなく「変わらずそこにあるもの」がひそかに描き出されていたことを指摘しておきたい。それはシュトルムの故郷フーズムの港の光景あるいは海に浮かぶ船の景色である。以下具体的に順を追って紹介することにする。

まずは「連合友好協会」の会合が開かれる「曾祖父の家」の描写は以下の通りである。

尖った切妻破風に砂岩の壺を嵌め込んだ家は聖霊降臨祭の折りに真新しいサンドグレーの油ペンキで上塗りを施されたばかりだったのだが、ぴかぴかに磨かれた窓からは、陽気な時を過ごしている今もそうであるように、向かい側にある港に停泊している船が見えた。船の三角旗は太陽に熱く照らされたマストからじっと垂れ下がっていた(18)。

会合で賑わう曾祖父の家の隣人達の描写の中にも港が現れる。

[...] そして隣人たちは今、あれこれ余計なことを喋ることもなく港の繁忙ぶりとその造船所を眺めていた。造船所から調子よく響いてくるハンマーの音は彼らに、時間が決して無益に過ぎ去っているのではないという安心感を与えてくれた(19)。

祖母が新居を訪れた時のこと、誰もいない家の中、いきなり目に入ったヒュギエイアの像が祖母を仰天させた。その部屋の窓から祖母は港に入った船を眺めていた。

町のはるか向こう、前方にある横町の家々の低い屋根越しに視界が開けた方向、緑の陸地と隣の島との間に、太陽の光を浴びて沖合の停泊地が広がっていた。きらめく光の中、一艘の大きな船のマストが聳えているのがかろうじて見て取ることができた。それは幸運な航海から帰還し、つい今し方投錨したばかりの義父の帆船だった (20)。

<私>の家族が未亡人になった祖母の家で一緒に暮らすようになる。亡き夫 (<私>の祖父)の思い出の品などがある屋根裏部屋は<私>にとっても懐かしい遊び場だった。そんな屋根部屋の窓からも海が見える。

確かにこちらに傾斜している破風には通りの側の西向きにかなり大きな窓があった——薬味の小部屋が3つ目の窓をふさいでいた——これらの2つの窓から家々の屋根越しに緑の湿地が、そしてそのさらに向こうに海が見えた。けれども目に映るすべてのもの——草を食む牛や通り過ぎてゆく船や水平線の彼方、海の上をたなびく霧のように広がる島で羽根を回している風車小屋——それらのものはあまりにも遠くて一幅の絵のようにそこにあり、そこからは何の音も聞こえてこなかった(21)。

『今と昔』において、場面が変わるたびごとに、その情景描写の中に必ず「海」あるいは「港」が現れていることは決して偶然ではあり得ない(22)。海を行き来する船、そして港の活気——そんな故郷フーズムの光景が常にシュトルムの心の中に生き続けていた証左なのである。

註

シュトルムの作品からの引用は *Sämtliche Werke in vier Bänden*, Hrsg. von Peter Goldammer, Aufbau-Verlag, Berlin, 8. Auflage 1995. による。以下 SW と略記して巻数と頁数のみを示す。

(1) SW. Bd.4, S.422.

『シリアに行くひとりの男 (*Es ging ein Mann im Syrerland*)』はフリードリヒ・リュッケルト (1788-1866) の寓話詩である。以下に拙訳を示す。

シリアに行くひとりの男／ラクダの手綱を引いた時／ラクダは怒りの身振りで／突然いらいらし始めて／恐ろしい息づかい／そんなラクダから男は逃げるほかに／駆けだし

て井戸を見つけた／偶然道ばたに／背後にはラクダの荒々しい息が聞こえて／男は分別を失ったに違いない／男は井戸の坑（あな）へもぐりこんだが／落下することなく宙ぶらりん／木イチゴの藪が茂っていたのだ／井戸の内壁の裂け目から／男はそこにしっかりしがみつき／自らの境遇を嘆き悲しんだ／見上げてみると見えたもの／それは恐ろしいラクダの頭が迫り来るさま／男を上で捕まえようとしているのだ／それから井戸の奥を見下ろしてみると／底に見えるのは一匹の大蛇／閉じ込められた腹いせに大きな口をあけて／男がもしも落ちて来ようものなら／ひと飲みにしようとしている／ラクダと大蛇の間で宙ぶらりん／哀れな男はさらに第3のものを見た／井戸の内壁の裂け目には／藪の根っこが食い込んでいて、それに男はしがみついている／そこで男の目の前にこっそりと現れたのはつがいのネズミ／一匹は黒ネズミ、もう一匹は白ネズミ／黒ネズミが白ネズミと一緒に／代わる代わる根っこに齧り付いているのが見えたのだ／二匹のネズミは囓ったり引きむしったり穴を掘ったり掘り返したり／土は根っこからそぎ落とされてゆく／そんなふうには土がぼろぼろと崩れ落ちてゆくのを／大蛇は奈落の底から見上げている／もうじき重みに耐えかねて／藪が根っこそぎ落ちるのを待ちかねて／男は不安と恐怖と苦しみで／取り巻かれ包囲され脅かされて／宙ぶらりんの悲惨な状況の中／空しく助けを求めた／そして男があたりを見回すと／ゆらゆら揺れる一本の枝が目にとまった／たわわに実った木イチゴの藪の枝が！／その時男は欲求を抑えることができなかった／木イチゴの実が男の目を引いた時／男はもはや、怒り狂ったラクダも／水底の大蛇も／ネズミの危険な遊びも見えなくなってしまった／男は頭上のラクダに唸らせるまま／眼下の大蛇に待ち伏せさせるがまま／真横のネズミに囓らせるがままにして／楽しげに木イチゴの実に手を伸ばした／それを食べたらいいだろうと思ったのだ／男は一粒一粒気楽に食べた／そして食べて甘味を楽しんでいるうちに／恐怖はすべて忘れ去られていた。

君は問う、恐怖をそうやって忘れてしまうことができる／その愚かな男は誰なんだと／友よ、ならば知るがいい、その男は君なのだ／この話が暗示しているものも知るがいい／井戸の底にいる大蛇／それは大きく口を開けた死の深淵だ／そして上で脅しているラクダ／それは人生の不安と苦しみだ／生と死の間で、世界という緑の茂みで宙ぶらりんに漂わなければならぬ者／それは君なのだ／根っこを囓って／支える枝もろとも君を死の力に委ねる二匹のネズミ／二匹の名前は「昼」と「夜」／黒ネズミは上手に隠れて囓る／夜から朝までこっそりと／朝から晩まで囓って／根っこを掘り崩すのは白ネズミ／そして驚愕と混乱のただ中で／木イチゴという官能的愉悦が君を誘惑して／君はラクダすなわち人生の苦しみを／深淵にいる大蛇すなわち死を／二匹のネズミすなわち昼と夜を／忘れてしまい、角のとがった井戸の内壁の裂け目から木イチゴをたくさん手に入れて／おいしく食べることの他には何にも注意を払わないのだ。

（原詩は http://www.pinselpark.org/literatur/r/rueckert/poem/p_elsing.html から引用）

ところで、「成り行き任せで3等車での私の旅につき合うことになった（[...]ließen es darauf ankommen, in meiner Gesellschaft dritter Klasse zu fahren.）」2人の女友達が周囲の冷たい視線を浴びることになる。その様子を見て<私>は、かつて同じようにある女性が3等車を利用したことによって体面を重んずる将校からの助けを得られず敬遠されたという話を思い浮かべるのだが、

これはシュトルムの幼友達であり最初の妻であるコンスタンツェのハノーファー駅での体験をそっくりそのまま書き留めたものである(SW.Bd.4,S.685f.)。物語の冒頭でいきなり話を脱線させてまでこのエピソードを挿入していることから、この作品が成立する8年前にこの世を去ったコンスタンツェへのシュトルムの思いの深さを見る思いがする。

(2) SW. Bd.4, S.424.

ここでは例えばドイツ語原文の "Die von heute"を文脈から「今日の不安(Die Sorgen von heute)」と解釈した。「不安(Sorge)」という語をすべて省略し全く表に出さないことによって見通しのきかない<私>の状況を際立たせようとするシュトルムの意図をそこに認めることは深読みに過ぎるであろうか。

(3) ビール醸造業を営んでいたシュトルムの曾祖父ヨアヒム・クリスティアーン・フェッダーセンの家をシュトルムは『みずうみ(Immensee)』(1849)、『後見人カルステン(Carsten Curator)』(1877)さらには『白馬の騎手(Der Schimmelreiter)』(1888)の中で古い時代のフーズム商人邸の典型として登場させている。

(Gerd Eversberg : Theodor Storm in Husum — Ein Rundgang auf den Spuren des Dichters —, S.29,

<http://share.dschola.it/itcpascal-giaveno/lingue/tedesco/Shared%20Documents/Theodor%20Storm%20Husum.pdf>)

(4) SW. Bd.4, S.435.

(5) 原典注釈によればこの『夢魔』は1781年制作ということであるが(SW.Bd.4, S.687.)、フュースリは1790年にもうひとつのヴァージョンの『夢魔』を制作している(Paula Schwerdfeger : Johann Heinrich Füssli's "Nachtmahr", 02.10.2012. を参照、URL は下記の通り)。

<http://blog.staedelmuseum.de/kunst-der-moderne/bild-des-monats-johann-heinrich-fusslis-nachtmahr>

(6) SW. Bd.4, S.436.

(7) SW. Bd.4, S.442.

(8) SW. Bd. 4, S.444.

このあと手紙の内容が紹介されるのであるが、それはこの手紙がその後も消失することなく保存され、<私>の目にも触れることのできるのもだったことを示している。枠物語の形式で語られる<私>の物語を「枠の外側」で聴いたあと、すべて作り話ではないかと疑う伯父をはじめ一家の人々に<私>はこの手紙を「聖なる文書(heiliges Papier)」として提示する(GW.Bd.4, S.446f.)。<私>にとって祖母と祖父との交際について実際にわかることはこの手紙がすべてであり、あとはすべて「想像」に任せるしかないのである。事実、この作品の中でふたりのやりとりが描き出されるのは「連合友好協会」でこの手紙を手渡す場面だけであり、その後新居の場面には祖父は全く登場しない。

(9) SW. Bd.4, S.443.

(10) Ebd.

(11)シュトルムの祖母マグダレーナは1854年7月11日に87歳の生涯を閉じている。当時にしては非常に長寿だったと言える。

(12) SW. Bd.4, S.453.

(13) SW. Bd.4, S.448f.

(14) SW. Bd.4, S.447.

ちなみに、入り口の上に掲げられた格言詩は以下の通り(SW.Bd.4, S.687)。

Hier ist Gotteshaus! Tritt ein, / Andachtsvoll doch mußt du sein!

(ここは神の家！ 入りなさい／けれどもお前は敬虔でなければならない！)

確かに「忌まわしい」と言わざるを得ない代物である。

(15) SW. Bd.4, S.437.

(16) Gerd Eversberg : Theodor Storm in Husum — Ein Rundgang auf den Spuren des Dichters —, S.4.

シュトルムは『聖ユルゲンにて(In St. Jürgen)』(1867)の中にもマリーエン教会を登場させている。かつての恋人アグネスに再会するべく 50 年ぶりに故郷フーズムに着いたハルレ・イェンゼンが教会の塔が見えないと言うのに対して、帰省の列車で偶然道連れとなった<私>が「ひょっとするとあなたはまだ昔の教会の塔のことを考えておられるのでしょうか、それはもう 40 年以上も前に取り壊されてしまいましたよ」と説明するくだりである(SW. Bd.2, S.251.)。

(17) SW. Bd.4, S.447f.

(18) SW. Bd.4, S.429.

(19) SW. Bd.4, S.440.

(20) SW. Bd.4, S.442.

(21) SW. Bd.4, S.451.

(22) 「この瞬間、これを書き記している窓辺からハンプルクの皮剥場が見渡せたことは私には不思議なくらい慰めとなった。その皮剥場は緑の木々の向こうから赤茶色の煉瓦の屋根をのぞかせていた」(SW.Bd.4, S.427) —— これは<私>が伯父一家に祖母の昔を話して聞かせた次第を書き記している「語りの現在(Erzählende Situation)」であるが、もしもこの皮剥場がローゼン通り(Rosenstraße)にあった皮剥場だとすればその場所から判断して<私>の視界には港も入ったはずである。ローゼン通りについては以下を参照した。

<http://www.feierabend.de/Hamburg/Strassengeschichte-22160.htm>